

中世・草戸千軒探検 ⑦

～鍛冶屋の家～

草戸千軒Ⅰ展示室は、“よみかえる草戸千軒”をキャッチフレーズに、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復元したもので、博物館のメイン展示となっています。

職人さんの家を次々と訪問してきましたが、今回が最後になってしまいました。路地の向かいにある鍛冶屋さんの家を訪ねてみましょう。

足駄あしだ作りの家から路地に出ると、すっかり日が傾いています。向かいの鍛冶屋さんの壁には、さっきまで遊んでいた子どもたちが置き忘れていったぎつちよう毬杖きつちようがあります。毬杖は、中世には子どもを中心に広く行われていた遊びで、現在のゲートボールのように、木製のきゅう毬きゅうをスティックで打ち合うものです。

鍛冶屋さんの家に入ると、夕食の支度が調っていました。今日、この家では何かおめでたいことがあったらしく、尾頭おかしら付きの鯛たいが出されています。私たちには豪華に見える食事ですが、発掘調査で出土した魚の骨ではタイが最も多く、近くに広がる瀬戸内海の海の幸に恵まれた草戸千軒の人々にとっては、あたりまえの食事だったようです。



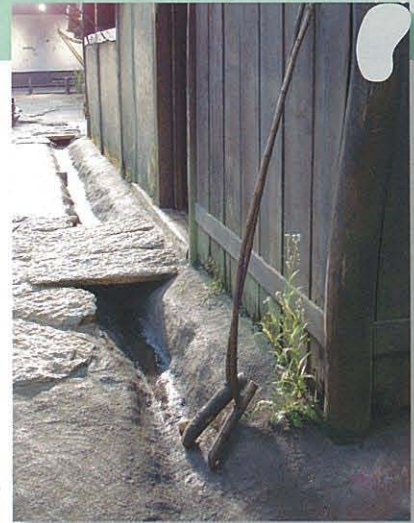
鍛冶屋さんの今日の夕食

家の奥は、鍛冶屋さんの仕事場です。鋤すきや鋤くわなどの農耕具、鎌や包丁などの刃物を作るのがこの鍛冶屋さんの主な仕事で、草戸千軒の町の人々や、周辺の農村の人々から注文を受けています。仕事は繁盛しているらしく、今日も注文された鎌を作るのに大忙しでした。



金屋子神

仕事場の中心には鉄素材を加熱するための炭火をおこす炉と、炉に風を送り込むためのふいご鞴ふいごが備えられています。ついさっきまで仕事をしていたらしく、炉にはまだ赤々と炭火が残っています。奥の壁の上の方には、鉄生産に関わる人々に信仰された「金屋子神」のお札を収めた神棚がまつられています。



子どもたちが置き忘れていった毬杖



炉（手前）と鞴